

●大成ファインケミカル

紫外線硬化型アクリルポリマーを開発

ハードコート材料に最適

大成ファインケミカル(株) (東京都葛飾区西新小岩三―五―一、☎〇三―三六九―一三二二)は、アクリルポリマー側鎖にメタクロイル基を導入し、マクロモノマーを共重合した紫外線硬化型アクリルポリマー「8KXシリーズ」を開発、九月一日より販売とサンプル提供を開始する。

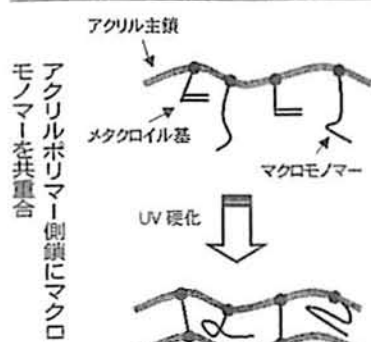
同シリーズは、これまでの紫外線硬化型アクリルポリマー側鎖にマクロモノマーを共重合したことにより、各種オリゴマーとの相溶性、塗膜硬度(鉛筆硬度H~2H)および可撓性(伸び率三〇~四〇%)において優れた性能を発揮。同シリーズをハードコート材料設計に組み込むことで、塗膜硬度を損なわずして硬化収縮によるフィルム基材

などの密着性改良および反り変形の低減を実現する。また、すべてポリマーでの設計であることから、材料として低皮腐刺激性である。加えて、乾燥後塗膜がタックフリーとなることで、コーティングと紫外線硬化の工程を分離することが可能であり、製造工程適性という点においても幅広い適用が可能となる。

現在、多用途にわたり高成長を遂げている紫外線硬化型樹脂は、光学ディスプレイフィルムといったエレクトロニクス分野でも、ハードコート材料として様々な機能性を求められている。光学用途では、特に透

明性と硬度において高い物性を要求され、現在ではアクリレート系モノマー・オリゴマーが材料設計の主軸として多くに用いられる。しかし、アクリル系オリゴマーは各種材料との相溶性が悪く、また硬化による

これらの課題をクリアした画期的な製品となった。同社では、用途や要望に合わせた幅広い材料設計に対応するため、ポリマーの二重結合当量(メタクロイル基一個あたりの分子量)を調整した製品ラインアップを取り揃え、さらなる材料カスタマイズを請け負うための研究体制も整えている。今後は、同シリーズと独自の樹脂設計技術により、電子材料分野のみならず、塗料・プラスチック表面コーティング剤などの幅広い分野での応用が期待でき、二〇一二年までに売上高五億円を目指す。



収縮が大きい。そのため、基材への密着不良および反り変形を引き起こすことや、モノマーは皮膚刺激性が懸念されるという問題があった。同シリーズは